

台湾総督府文書目録

第1巻〔明治28年・29年分〕、第2巻〔明治30年分〕
中京大学社会科学研究所台湾総督府文書目録編纂委
員会編

東京 ゆまに書房発行

1993.12、1995.3 B5判 513p、450p 各冊18,540円

明治28年5月10日完結の「樺山【資紀】中将大将ニ任ジ台湾総督仰付ラル」(第1巻243頁)同年6月17日完結の「総督府始政祝典ニ関スル件」(243頁)同年6月20日完結「台湾病院開設」(247頁)というような件名を見れば、多少とも日本近代史に関心のある人なら誰でもゾクゾクッとくるに違いない。また「本島在来ノ社寺保護ニ関スル諭告」(第1巻172頁)「土匪ノ一部ハ其原因人夫職工等ノ非行ニ起因スルヲ以テ取締方軍務局長通牒」(336頁)「集々街及林圯埔ニ於ケル土匪騒擾ノ際損害ヲ受ケタル外商ニ対シ救恤金下付ノ件訓令」(498頁)「本島人患者ハ入院料及薬価ヲ徴収セス」(第2巻50頁)「外国人ニ阿片吸食ヲ許サス」(52頁)「台湾人ニ郵便貯金曉諭」(77頁)などの件名は、台湾統治初期の様子を彷彿させる。

台湾にはそのような日本による統治の根本

史料が眠っていた。その内容を初めて多くの人の目にふれるようにしたのが本目録である。初めての旧外地公文書件名目録として、是非購入を薦めたい。

本目録は、明治28年から昭和20年に至る全領台期間にわたる『台湾総督府公文類纂』から悉皆的に文書の件名を拾おうというものである。現在刊行ずみのもは明治30年分の第2巻までで、最終的には全40巻以上の分量になる。原簿冊は、台湾省政府の所在地の中興新村にある中華民国台湾省文献委員会が保管している。

刊行は、日本統治下の台湾史を実証的に捉えようとする台湾の思潮を背景に、台湾で衝撃と好感をもって迎えられた。なかでも台湾の有力紙『自立早報』は、早くも1994年2月27日付け紙面で特集を組み、「台湾史学界国宝級史料」である総督府公文書を表に出してくれたという感謝の念を込めて、「学術上の価値よりも、歴史的意義がさらに重要である」と紹介している。これまで同史料が放置されていたというよりも、政治的意図によって隠されていたと台湾人の目に映っていたためである。

そうした評価も含め、台湾の学界内外からの好意的な評価は、檜山幸夫氏を中心とする中京大学主宰の調査団に対する台湾側の信頼感が生み出したもののように思われる。調査団は、1982年から少なくとも年1回訪台して同史料の調査を重ね、最大の規模となった1994年夏には研究者と大学院生合わせて35名程が平均3週間近く、お手伝いの学部学生約10名が約5週間滞在している。そんなふうには膨大な人手と経費とを費やしてきた研究グループの熱意が台湾側の関係各方面に畏敬の念を引き起こしたのである。現在では信じられないことだが、着手した当初はかなり警戒されたということで、国家機密を見せてははいけないという指令が突然だされ、現地滞在中に閲覧が不可になったこともあったと聞く。

本目録は、原簿冊の目次をベースに作成しており、件名中「○○等」と略記された人名・

地名はすべて書き加え（人名数百名分を書加えたところも多い）、件名中の誤記や不明瞭な文言もできる限り修正し、また件名洩れ（誤綴等による）も悉皆的に拾っている。しかし、コンピュータ・データベース化を念頭に置いているにもかかわらず、東京都公文書館の『行政文書目録・学事編』と違って、文書中の人名・学校名・機関名等を悉皆的にデータ化するところまではもっていけなかった。文書が海外の施設に保管されている上に、いまなお目録編纂者にさえ自由な閲覧・複写・筆写が許可されないという制約された条件の下では、目的の文書を探し出せるようにする工夫は、その辺が限界であった。私も含め、編纂に参加している者の悔いの残るところである。なお、第1巻の解説（檜山氏執筆）には目録編纂に際して直面した技術的な問題点が詳述されており、全史料協の会員にとって殊に興味深いものであろう。

所澤 潤・群馬大学教育学部